

社報 御霊本宮

第79号

発行者

御霊神社本宮
宮司 藤井利夫
五條市霊安寺町
0747-23-0178

発行日

令和3年
6月1日

ホタル

(1) 日本書紀の巻二、神代・下の天孫降臨のところに、天照大神は「孫である瓊瓊杵尊を立てて、葦原中国（日本）の君主としたいと思われた。しかしその国に、螢火のように輝く神や、蠅のように騒がしい良くない神がいる。」という記述があります。ここに書かれた「螢火のように輝く神」は原文では「螢火光神」と表記され「ほたるひのかがやくかみ」と読みます。

螢火光神は天神で、「蠅のように騒がしい良くない神」は国神です。天神とは高天原にいる神、国神は地上にもとからいる神ですが、ここでは皇祖神と悪神、さらに言えば大和系と出雲系を意味していると思われます。このあと、経津主神を中心にした使者が出雲に向かい国譲りを経て葦原中国を平定し、瓊瓊杵尊が高千穂の峰に降り立ちます。

さて、「ほたる」は平安時代の和名類聚抄には、「螢 和名保太流」とあり、古代より「ほたる」と呼ばれていたことが分かります。

その語源には諸説ありますが、次の三つの説が有力です。

江戸時代中期の語源辞典である「日本釈名」には「螢 ほは火也、たるは垂也、垂は下へさがりたる、也」として「火垂」が語源だとする説。

新井白石の「東雅」には「ホは火也、タルは炤也」とする「火炤」説。「俚語集覧」では「火照」説をとっています。

ちなみに、ゲンジボタルは光って飛んでいると突然ひゅつと落ちることがあり、この様子から「火垂」とされ

たとも考えられます。

多く見られるホタルは、ゲンジボタルとヘイケボタルで、この二種類は特によく光ることで知られています。これらの名前は、光って飛び交う様子が、源氏と平家の魂が死んでもなお合戦をくり広げているようだということから名付けられたという説があります。また、光り方が違い、ゲンジボタルは大きくゆっくり光り、ヘイケボタルは小さな光がすばやく点滅します。

ホタルは蝶やカブトムシと同じで、卵↓幼虫↓さなぎ↓成虫と変化しますが、そのいずれのときも光るのだからです。その光方は成虫のときよりずっと弱い光だということですが、その理由は分かっています。

ホタルが飛び交う幻想的な夜がまもなく始まろうとしています。



宇智郡 狛犬めぐり

丹原町 御霊神社

頭髪に特徴のある狛犬です。

毛は渦巻き、

毛先が鋭く尖っています。

このように巻

き毛が頭部の左

右に多くあり、

隆々としていま

す。

さぞや鬣も鋭く逆立っているだろうと思つて頭部の後ろを見ると、二方に分かれた毛が流れるように背に張り付いています。

大きく平たい耳は、垂れ下がっているというより、二つに折れて重なっている感じがです。

一見、力強い狛犬なのですが、優しい部分もあって、思わず「へえ〜」という声が出てしまいました。



中世人の月蝕観

去る五月二十六日、月食がありました。月蝕に関する中世の二つの資料を見てみると大変おもしろいものがあります。

平安末から鎌倉前期の史料である、九条兼実の日記「玉葉」には、長寛二年（一一六四）から建仁三年（一二〇三）までのことが書かれ、その間に十回九回の月蝕が記事に出てきます。

承安二年（一一七二）六月十五日、半分ほど欠けた月が東の空から昇り、皆既月食となつて一時間半ほどその状態が続きました。兼実自身が「殊に慎むべきにより」ということで、一字金輪と呼ばれる本尊の前で祈禱を行いました。一字金輪法は密教でも最深秘とされています。おそらく除病延寿の息災法として採用されたもので、月蝕によって健康が害されると考えたことが窺われます。その後の記事も同

様のものがあり、月食は不吉なものと思えられています。

「吾妻鏡」は鎌倉幕府の正史で、治承四年（一一八〇）から文永三年（一二六六）までの記事の中に、三十七件の月蝕の記事があります。

建久元年（一一九〇）六月十四日、御家人の小山朝政の家に頼朝が出かけ、月蝕を理由として止宿したことを伝えていきます。月蝕の最中に屋外にいることは忌謹むという風習がありましたが、白拍子を集めて酒宴を催していたことから、深刻に不吉だとは考えていないようです。健保四年（一二一六）年の月蝕の夜には、北条政子が亡き父時政の盆供のため寿福寺に出かけたと記していますが、月蝕のことなど一向に意に介していません。

このように月蝕は、公家にとっては「大変不吉なもの」として考えられていたようですが、武家にとってはそれほどのもとは思われていないことが分かります。

本宮所蔵品

木造狛犬

本社には社

頭の石造狛犬のほかに、木造の狛犬を所蔵しています。



そのなかで最古のものと思われるのが、この一対の狛犬で、室町時代初期の製作と推定されています。

木造の狛犬は鎌倉時代が最盛期だったといわれます。その頃の特徴としては向かって左に位置する片形の角が長く突き出ているところです。この狛犬の角も鋭く出ていたものと思われます。（欠損）

また、像高約二〇cmと小さいのも特徴のひとつで、平安時代のもは小型のものが多く、時代が下るにつれて大型化していきます。小型のものは本殿内に安置されていました。

八百万の神々

あめのほひのみこと

天之菩卑命

素戔嗚尊が天照大神の右の角髪に巻いた勾玉を噛み砕いて吹き飛ばした息吹の霧から出現した神です。

正勝吾勝勝速日天忍穂耳命が葦原瑞穂国（日本）に降りようとしたとき、瑞穂国が「大変騒がしい」と言いました。そこで、天之菩卑命が葦原瑞穂国の平定のために出雲の大国主神のもとに遣わされましたが、大国主神に媚びて出雲に住み着き、三年間高天原に戻りませんでした。その後、大国主神に仕え、出雲の発展に尽くしたとされています。

名前の「ホヒ」を「穂霊」の意味として稲穂の神とする説と、「火日」の意味として太陽神とする説があります。農業神、稲穂の神、養蚕の神、木の神、産業の神などとして信仰されています。

五條十八景を訪ねて

五條十八景とは

五條十八景は、詩と画からなる一冊の詩画帖で、五條およびその周辺の風景のうち、風光明媚なものが十八景描かれていきます。

詩は宝永年間（一七〇四〜一一年）

に紀州の文人、祇園南海が詠んだもので、約百年後の文化年間（一八〇四〜一八年）に、初代五條代官を勤めた河尻甚五郎が三井丹丘に命じてこの詩をもとに画を描かせました。また、書や跋文（あとがき）は老中首座の松平定信や大学頭（だいがくのかみ）の林述斎、寛政の三博士とよばれた尾藤二洲や古賀精里、柴野栗山、江戸後期の三筆の一人、市川米庵らの筆になるものです。このように、この一冊の詩画帖の成立、ひいては江戸時代の五條に、これだけの当代を代表する文人墨客が関わっていることは、非常に興味深いことであります。（五條市HPより）

今月は、第六景「芳野川筏」に見る吉野川を訪れました。

薄筏千章 津を問はんと欲す
落花流水 杳とし垠なし
蒿師は恨むに堪へ 羨むに堪へ
送り尽くす 年々芳野の春

多くの木を

つなぎあわせ

た筏が今やっ

と渡し場につ

いた。はるか

に流れる吉野

川に桜の花が限りなく散りゆく。筏師

は世を恨まず、人をうらやむこともな

く、毎年毎年、芳野の春を楽しみなが

ら悠々と過ごしている。

かつては水流も多かったであろう

吉野川は、今はダムによる水量調節も

あつて流れは穏やかです。山林業が盛

んだった頃は川岸に貯木場があり、随



分賑わっていたと聞きます

が、今はそれ

を想像するの

みです。

川の正式な

名前は「紀ノ

川」となりますが、地元の人々にとつ

ては「吉野川」に愛着があります。

吉野の語源は、「ヨシ」は美称の「良

い」で、「ノ」は山麓の野を意味する

との説があります。そんなところを流

れる吉野川で泳ぎ、魚を釣った子ども

の頃の思い出は、忘れることのないも

のです。



大杉谷は
すごかった！

大杉谷を遡ってきました。二十歳代から行きたいと思っていました。吊橋の落下や山肌の大崩落などがあつて、今日まで行くことができませんでした。ようやく念願叶いましたが、想像以上の険路でした。数日來の雨で、川は水量多く轟轟と音を立てて激流となっていました。この日も雨で滑りやすく、慎重に歩きます。山肌を縫うように造られた登山道は、道ではなく足を掛けるためだけにあつた窪みの連続で、踏み外せば激流にのまれて落命するといふものでした。それでも連続する滝やV字谷の景色は最高でした。



Instagram
@goryohongu



Twitter
@goryohongu



#御霊本宮 #goryohongu を
付けて投稿してください。

公式ホームページ

<http://goryojinja.or.jp>

日本書紀にみる

十一代垂仁天皇(六)

二十三年秋九月二日、群卿に「誉津別命は三十歳になり、長い顎髯が伸びるまで、赤児のように泣いてばかりいる。そして、声を出して物を言うことがないのは何故か。皆で考えて欲しい」と言われました。

冬十月八日、天皇は大殿の前にお立ちになり、誉津別皇子はその傍に付き従っていました。そのとき白鳥の鶺鴒が大空を飛んでいきました。皇子は空を仰いで鶺鴒を「あらんになり、「あれは何物か」と言われました。

天皇は皇子が鶺鴒を見て口を利くことができたのを知り、喜ばれました。傍の者に「誰かこの鳥を捕えて献上せよ」と言われました。そこで、鳥取造の祖である天湯河板拳が、「手前が必ず捕まえましょう」と言いました。

天皇は天湯河板拳に言われました。「お前がこの鳥を捕えたら、きつと充

分褒美をやるう」

湯河板拳は鶺鴒の飛んで行った方向を追って出雲まで行き、ついに捕えました。ある人は「但馬国で捕えた」とも言います。十一月二日、湯河板拳が鶺鴒を奉りました。

誉津別命はこの鶺鴒を調教し、ついに物が言えるようになりました。これによつて湯河板拳に賞を賜わり、姓を授けられ、鳥取造といえます。そして鳥取部、鳥養部、誉津部を定めました。

二十五年春二月八日、阿倍臣の先祖である武淳川別、和珥臣の先祖である彦国葺、中臣連の先祖である大鹿島、物部連の先祖である十千根、大伴連の先祖である武日といった五大大夫たちに「先帝、崇神天皇は賢くて聖であり、聡明豁達、政治をよくご覧になり、神々を救い、躬みを慎しまれた。それで人民は豊かになり、天下は太平であった。私の代にも神祇をお祀りすることを、怠ってはならない」と言われました。

(次号につづく)

夏越大祓

茅の輪神事を

斎行します

茅の輪をくぐつて神社に参拝し、心のリフレッシュと、健康安全を祈願しましょう。

なお参拝

の折にはマ

スクの着用

をお願い



日時 令和三年六月二十八日(日)

午後三時開始

雨天決行(荒天時中止)

場所 御霊本宮拝殿

祭典 茅の輪神事による大祓

参加者 参列者の健康長寿祈願祭

受付 当日開始十五分前より

拝殿にて

参加費 一人五〇〇円

祈符符、茅の輪守り授与

万葉の花たち

あふち(センダン)

妹が見し 棟の花は 散りぬべし
わが泣く涙 いまだ干なくに

山上憶良(巻五・七九八)

大宰府の長

官である大伴

旅人の妻の死

を悲しんで詠

みました。

「長官の奥様



がご覧になったあふちの花は散ってしまいました。でも私の涙は乾きません。」

旅人を気遣う優しさがあふれています。

あふちはセンダンの古名で、暖地に自生する落葉高木です。春に淡い紫色の小さい花をつけ、秋に黄色い実をつけます。樹皮や果実は駆虫剤などに利用されています。